中根清司先生を偲ぶ

森下　芳孝
鈴鹿医療科学大学副学長

故 中根清司先生

生物試料分析科学会名誉会員、中根清司先生は、令和2年7月2日にご逝去されました。享年84歳でした。謹んで哀悼の意を表します。

中根先生は、昭和11年に岐阜県に生まれ、昭和30年より名古屋大学医学部附属病院に勤務され、昭和36年7月に文部技官に任官され、昭和54年5月に検査部副臨床検査技師長、55年4月に臨床検査技師長を歴任され、平成9年3月に定年退官されました。この間、昭和36年に名古屋工業大学短期大学部工業化学科を卒業され、昭和39年10月から2年間、アメリカ合衆国へ留学され、マサチューセッツ総合病院生化学研究所で最新の検査技術を修得されました。

中根先生が帰国後の昭和40年代前半は、臨床検査の重要性が認められ、自家調整だった試薬が試薬メーカーによってキット化され、検査件数も飛躍的に増加し、大量検体処理が可能な自動分析機が大学病院を中心に導入され始めた時代でありました。当時、自動分析機はテクニコン社のコンティニュアス・フロー方式を用いたオートアナライザーが主流でした。先生は、工業分野で利用されていた酵素固相化技術を臨床検査分野に適用し、フロー方式に使用されているガラスやナイロンチューブ内面に酵素を固相化することで半永久的に使用できる固相化酵素チューブを開発されました。また、反応系の測定対象となるH_2O_2に対してH_2O_2電極を使用し、固相化酵素チューブとH_2O_2電極を組み合わせた多くの自動化定量法を開発されました。これらの研究業績は高く評価され、昭和54年5月に臨床検査関連領域では最高の栄誉とされる第14回小島三郎記念技術賞を受賞されました。その他にも、昭和47年と昭和56年に研究論文が評価され日本臨床検査技師会会長賞を2度受賞されました。

生物試料分析科学会においては、初代会長の故・林長三先生（名誉会長）を中心として、片山善章先生（名誉会長）や小川善資先生（名誉会長）らの関西グループと中根先生（名誉会員）を中心とする故・影山信夫先生（名誉会員）や青木哲夫先生（名誉会員）らの中部グループとで、20年以上にわたって関西と中部の会場で年2回行われてきた「臨床化学のつどい」という臨床検査技術交流勉強会が本学会前身の「生物試料分析研究会」の発展そして現在の「生物試料分析科学会」の設立に大きく関わっています。

なお、中根先生は本学会設立当初から平成16年までの長きにわたって副会長を務められ、平成8年には第6回集会長を担当されました。また、平成9年から20年まで本会誌の編集の全てをお一人で携わって下さいました。手間暇のかかる面倒な作業をやって頂き、学会としても非常に心苦しかったのですが、「編集作業は、僕は好きだから、気にしなくていいよ」と言って下さり、それに甘えていました。大変、申し訳なかったと思っています。先生は、活字のフォントやサイズ、図表の配置やサイズなど細部にわたって注意を払われ、非常に体裁の整った会誌にされました。

その他、昭和61年4月から平成7年3月まで愛知県臨床衛生検査技師会会長に就任され、特に昭和62年には同技師会の法人化を成し遂げられました。平成6年4月から平成8年3月まで中部地区臨床衛生検査技師会会長を務められ、医療の発展に大いに貢献されました。

中根先生は、検査や分析、実験に対しては非常に厳しい先生でありましたが、普段は非常に温厚で優しく、かつ浪花節的なところもあり、私達後輩の面倒見の良い先生でありました。そして、分析の手法や技術はもとより、検査や分析することの楽しさを教えて下さいました。ま

た、中部地区の臨床化学を志す技師にも暖かく指導育成にあたられ、病院間の技師連携の重要性を説かれました。その教えは、今もなお、この地区には生き続けているように思います。

晩年は、名誉会員の木澤仙次先生や多くの仲間たちと好きな海釣りを楽しむなどして、お元気に過ごされていました。もう、お会いできないのかと思うと非常に寂しい限りです。今後は、中根先生からいただいた多くの教えを大切にし、臨床検査学の発展に寄与していきたいと思います。

心から、ご冥福をお祈り申し上げます。